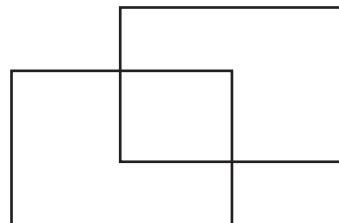


ウスバカゲロウ

相地 満



わたしは、薄羽蜻蛉（うすばかげろう）です。

透明の翅をもつ、きれいな昆虫です。木もれ日の落ちる森にすんでいます。

かがやく四枚の翅は、うつくしい形をしています。

目の大きいかわいい頭は、小さな胸と細くて長い腹をしたがえています。

脚は、かぼそく六本。いっぱいに広げて、とまります。

飛びたつとき、なにか音楽がきこえてくるようです。

音楽は、りらら、ひらひらと、音なくあたりに響きます。

大きな翅と細長い胴体が、やさしくあおるように動くので、木もれ日の光がかがやくのです。

細かい宝石をちりばめて、森のなかの宙を飛びます。

雄も雌も、おなじような格好をしています。いわばユニセックスです。ですが交尾器がちがいます。

産卵のためにしっかりとした交尾をします。

こんなウスバカゲロウ。幼虫時代はアリジゴクと呼ばれています。18 種類いるウスバカゲロウ。

みな幼虫時代はアリジゴク。巣穴をつくるもの、歩きまわるもの、石垣や樹の皮に止まり、こけなどに埋もれているものなど、さまざまです。

半島で巣穴をつくるウスバカゲロウは 3 種類。ウスバカゲロウ・ハマベウスバカゲロウ・コウスバカゲロウですが、ウスバカゲロウ以外の巣穴は、まだ見つかっていません。巣穴を見つけたら、ほとんどがウスバカゲロウの子どものアリジゴクと思ってかまいません。

アリジゴクの巣穴は、神社の森の社殿の下や、積み置かれた木材のすき間などにあります。砂が乾いた、雨のかからない場所です。アリジゴクは雨がきらいです。巣穴の乾いた砂が、役目を果たさなくなるからです。砂がしめると、獲物がすべり落ちにくくなります。ですから、よく成長したアリジゴクは梅雨に土のなかで繭をつくり、蛹になります。梅雨が明けてしばらくすると、蛹から成虫がもそもそと抜け出します。抜け出したら大急ぎで木の枝などに止まり、長い翅やからだをのびします。みるみる大きくなって固くなり、飛んでいきます。出会いをもとめて旅に出るのです。

ベンベロとベンベコ

東北ではネコヤナギのことをベンベロという。岩手あたりの方言である。＜ベンベロも萌え立つ＞などという、いかにも春が来た感じがする。だが宮沢賢治は陽炎にベンベロをあてている。陽炎とは、春のうらかな日に、野原などにちらちらと立ちのぼる気。日ざしのために熱くなった空気で、光が不規則に屈折されて起こる。「いとゆう」ともいう。はかないもの、ほのかなもの、あるかなきかに見えるもの、などを形容するのにも用いられる。その際、蜉蝣を意味することもある。かげろうに「蜻蛉」をあてることもある。この場合はトンボを指す。蜉蝣はウスバカゲロウ・クサカゲロウなどにあてられる。またカゲロウ目昆虫 Ephemeroptera グループの呼称に使われる。ベンベロを使った宮沢賢治の詩を取り出そうとして、はたと困った。ベンベロ＝陽炎の詩があったのだが、容易に出てこない。わが家には校本全集をはじめ 80 冊にのぼる賢治関連の本がある。その中から一遍の詩が出てこない。もしかして記憶違いだったのかもしれない。初期校本全集に索引のないのがうらめしい。ベンベロ＝ネコヤナギのみにされているのが悲しい。



ネコヤナギ

若いころ、丹後半島のつけ根、舞鶴市の山村で子供会をしていた。川沿いに建てられた公民館に泊まり込んでいた。朝、子どもたちが来て言う。「ベンベコ採りに行こう！」と。ベンベコとはアリジゴクのことである。長い時間歩いて、たどり着いた大きな神社の床下には無数のアリジゴクの巣穴があった。後日、＜ベンベコとベンベロ＞、＜蜉蝣と陽炎＞、この二つの異なる意味を持つ方言の言葉が似ていることに興味を抱いた。はかないもの、ほのかなもの、あるかなきかに見えるものに、それらは確かに共通している。

ウスバカゲロウと海

浜辺近くに住む人から、ウスバカゲロウは「夜、羽化すると暗い海の方に向かう」と聞いた。不思議に思った。なぜだろう。夏の夜、海辺に立ってわかった。闇夜の海辺で明るくかがやくのは漁火である。その向こう、湾の対岸にならぶ工場地帯のするどい明かりである。それは漆黒の海に浮かぶ光である。だが虫が漁船にたどり着いたとき、雌雄の出会いがあるのだろうか。もし、あったとしても、卵を産みつける砂地を見つけ出すには、また近くの浜辺に戻らなくてはならない。対岸の工業地帯を目指していくのだろうか。だが、それには湾に吹く風を乗りきらなくてはならない。それとも風に流され、また別の場所に移るのかもしれない。それは長い旅になっていくのかもしれない。かつて、リュウキュウホシウスバカゲロウが丹後半島で多く採集されたとき、その地で幼虫や繭を見つけることができなかった。＜それらは風に乗って流されてきた＞、と考えられた。同じように半島のウスバカゲロウは、羽化したのち、どこへ飛び去るのであろう。最近になり、浜辺はずいぶん明るくなった。海沿いに明かりがつけられたからである。暗やみの向こうに光明を見出だしていたものたちは、行き場を失いとまどっている。そして乾いた死をむかえる。羽化しても向かうべき場所のない、容赦ない、ただの灯明の影のなかに、はかないその身をゆだねている。

<採 集>

●幼虫＝アリジゴク

営巣型、徘徊型、定着型などがあり、それぞれに採集法もちがってくる。ウスバカゲロウはもっとも一般的な営巣性アリジゴクである。基本的には森の住人であり、樹の根元や、うろの中、建物の床下、軒のある壁の土台あたりに、すり鉢状の巣穴をつくる。巣穴はよく乾燥しており、効果的なトラップとなっている。巣穴の中心で一番深いところから大顎を出し、すべり落ちてくるアリや多足類を捕食している。獲物を大顎ではさむとき、体内に強い消化液を注入する。そのため、大きな獲物でも体液をゆっくり吸汁することができる。

細かくすべりやすい砂でできた巣穴中心部をスプーンですくうか、棒でかきまぜると、アリジゴクが出てくる。巣穴のなかから大顎を出しているものをねらえば、確実である。

外側から活動がのぞけなくても、巣穴ごとに砂をすくいとったり、かきとれば、一緒に幼虫を採ることができる。その際、夏場は付近にある繭が採れることもある。

●成虫＝ウスバカゲロウ

繭を採集して箱に入れ、枝か棒を刺しておけば、そこに止まり成虫が羽化する。固化した成虫を得ることができる。野外では、夜間、灯火に集まるので、ライトトラップを仕掛ける。スウィーピングで捕獲することもできるが、偶然性が強い。

<飼 育>

●幼虫

孵化後、一齢幼虫が出てくるが、ごく小さいので見落とされている。飼育は、三齢から終齢幼虫を対象にする。野外での採集も、そのあたりの幼虫が多く採集される。発砲スチロールに細かく乾いた砂を入れて飼う。

エサは、アリ、ダンゴムシ、サシムシなど徘徊するものは、そのまま多数入れておく。幼虫は、巣穴から砂を掘りエサとなる虫に当てて、落とそうとする。アカムシなど動き回らないものは、そのまま巣穴に投入する。この時期のエサの摂取量に応じて、蛹化が早まるものと、遅れるものがでてくる。遅れたものの蛹化は、次年度に繰り越される。幼虫を多数一緒にして飼うか、個別に飼うかは、個別に飼うほうがよい。アリジゴクはとても神経質な生き物である。多数一緒に飼うと、砂のかけ合いになり、巣づくりできないものが出てくることがある。

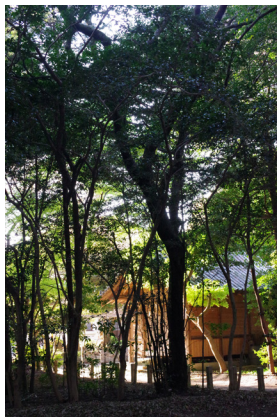
●成虫

終齢幼虫は、梅雨時に繭をつくり、雨をさける。梅雨明け後、しばらくすると、繭のなかの蛹から成虫が羽化する。地面から垂直または斜めに立っているものにつかまり、ちぎまった翅をのぼす。上方にのぼろうとする勢いが強く、天井までのぼるものもあるため、刺しておく棒や枝の長さを考慮する。羽化の際、棒や枝の頂きにまでのぼりつめるのが普通である。翅やからだのびきったあと、糞石を一つする。糞石は硬く、その石を集めてみえる方もおられる。

PHOTO gallery



1



2



3



4



5



6



7

1. ウスバカゲロウの標本 2. アリジゴクがいる神社 3. アリジゴクが巣穴をつくる場所 4. アリジゴクの巣穴
5. アリジゴク__その1 6. アリジゴク__その2 7. アリジゴクの繭と蛹のぬけがら